

＜中学校 教育相談＞

互いを認め合う学級集団をつくる工夫

ー構成的グループエンカウンターとグループワーク・トレーニングを通してー

糸満市立糸満中学校教諭 角 田 る り

内容要約

希薄な人間関係の中におかれた生徒たちは、相手の気持ちを考えた行動ができなかったり自分の思いをうまく伝えることができない。そのため、認められているという実感が弱く自己肯定感も低いことが考えられる。そこで、構成的グループエンカウンターやグループワーク・トレーニングなどの集団の持つ力を利用してあたたかいふれあい体験を取り入れた。その結果、集団への所属感や自己肯定感が高まり、お互いに認め合う人間関係が育まれていった。

【キーワード】 構成的グループエンカウンター グループワーク 自他受容 認め合い 自己肯定感

目 次

I テーマ設定の理由	71
II 研究内容	72
1 研究の全体構図	72
2 認め合う学級集団	73
3 特別活動における望ましい集団活動	73
4 道徳における「心の教育」と認め合う集団	73
5 教育相談の考え方	73
6 人間関係づくりを意図した集団活動の方法として	74
7 生徒理解・学級理解の方法	74
III 授業実践	75
1 主題名	75
2 主題設定の理由	75
3 指導計画	76
4 本時の指導計画	77
5 授業の分析と考察	79
IV 研究の考察	80
1 Q-Uテストの結果と考察	80
2 学級の生徒の様子	80
V 研究の成果と今後の課題	80
1 研究の成果	80
2 今後の課題	80

＜中学校 教育相談＞

互いを認め合う学級集団をつくる工夫

－構成的グループエンカウンターとグループワーク・トレーニングを通して－

糸満市立糸満中学校教諭 角 田 る り

I テーマ設定の理由

中教審答申「新しい時代を拓く心を育てるために」（1998）の中で、「心を育てる場としての学校教育を見直そう」という方向性を打ち出している。学習指導要領でも「生きる力」の一つに「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を育てること」の重要性をあげている。「豊かな人間性」や「心」の問題を重要視する背景には、近年、学校に行きたくても行けない、あるいは行かないなど不登校の問題が深刻となっていること、学習や集団生活・対人関係に不適応感を抱えた不登校予備軍も控えていることなどがあげられる。これは、現代の価値観の多様化や都市化、少子化に加えて核家族の増加などにより、異世代や異年齢間の交流や地域社会とのつながりも薄れがちな環境も一因と言える。また人間関係の希薄さは、子どもたちの遊び方の変化にもあらわれている。パソコンやテレビ・ゲームなどの普及により、外遊びから室内遊びなどひとり遊びが増えてきた。それが子ども同士の関係作りのチャンスを奪っていると考えている。その結果、他人との関わりの場が減り、対人関係を結ぶ上でのルールやスキルが昔ほど自然な形で学ぶことが少なくなってきた。

学校においても対人関係の未熟さが、他人を気にしない無関心派や、友達にどう思われるかを気にしすぎて身動きのとれない生徒などに現れている。また、コミュニケーション不足からくるものと考えられる対人関係の歪みやトラブルなどもよく見られる。このような問題を抱えた生徒たちは、他人だけでなく、自分自身をも受け入れているとは言い難い状況がある。誰もが学校不適応、あるいは人間関係不適応の状態と背中合わせにあるとも言える。これまで、特に対話のある授業をこころがけたり、個別の教育相談等に自分なりに力をいれてきたつもりである。養護教諭・スクールカウンセラー等とも連携してきたが、十分な成果をあげることができなかった。

このような課題を解決するために、道徳や学級活動の時間を用いて、生徒同士の関係をうまく作っていくなど学級集団の育成に力をいれていくことで、集団の力を借りて個々の人間的成長の援助をすることができるのではないかと捉えた。「個」を活かす「集団」、「集団」の中で活かされる「個」を目指し、一人一人の生徒の心に、学級が安心して生活できる「心の居場所」との思いが芽生え、生徒同士のかかわりやグループ体験等を通して人間関係を学ぶことで、学校・学級が楽しいと感じられるようにしたい。

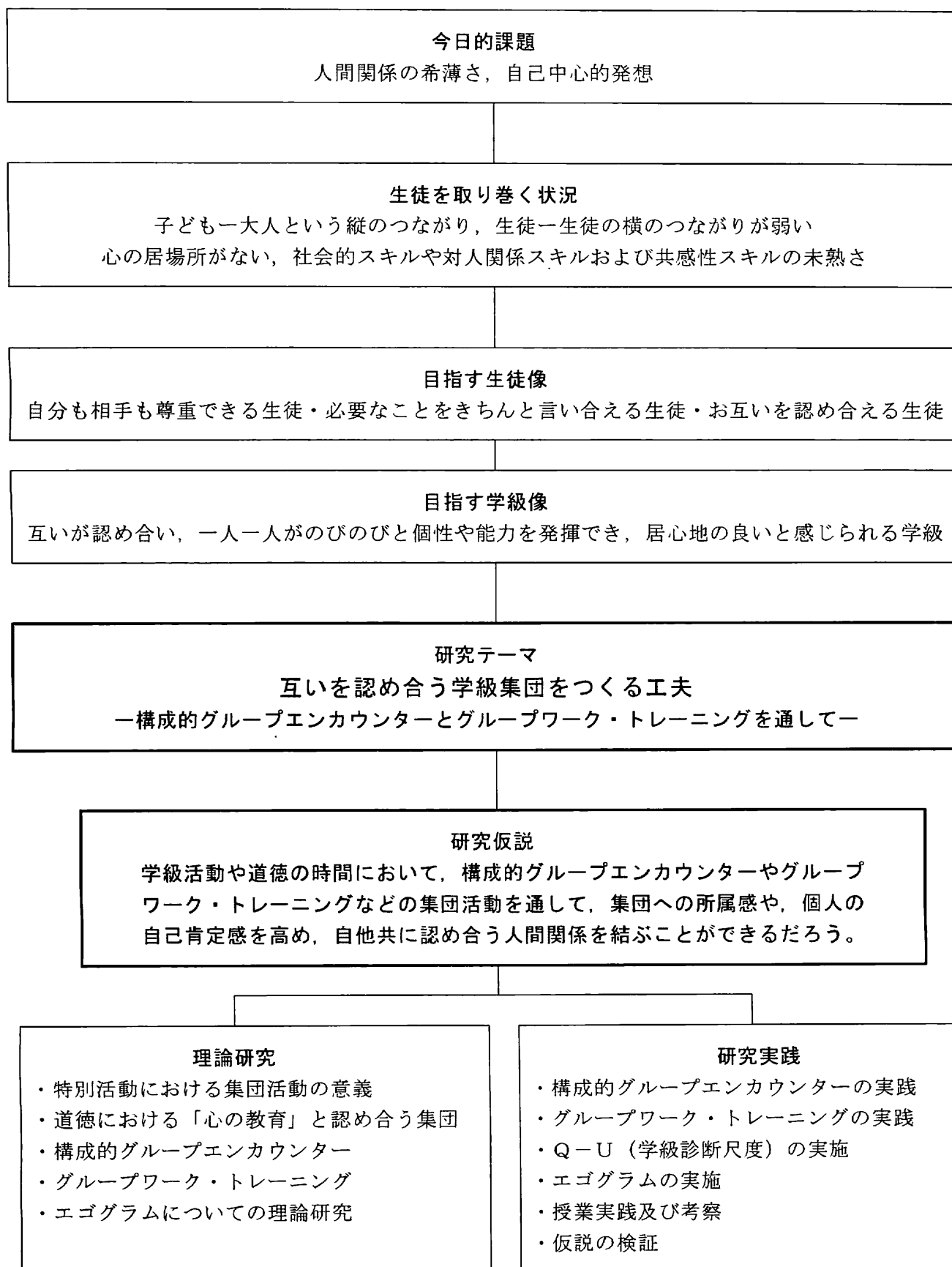
そこで、学級の中でふれあいのある人間関係づくりを推進する構成的グループエンカウンターや、グループワーク・トレーニングなどの手法が有効ではないかと考えた。一人一人が自尊感情を高めつつ、他の生徒らとかかわりを深め、互いに認め合える集団を作れると考え、本テーマを設定した。

＜研究仮説＞

学級活動や道徳の時間において、構成的グループエンカウンターやグループワーク・トレーニングなどの集団活動を通して、集団への所属感や個人の自己肯定感を高め、自他共に認め合う人間関係を結ぶことができるだろう。

Ⅱ 研究内容

1 研究の全体構造図



2 認め合う学級集団とは

マズローの欲求階層説によると、人間の欲求というのはまず食べる・寝る等の生理的欲求を満たしたうえで安心して過ごせる居場所づくりへと向けられる。そして愛し愛される、守られる、認められる等、人との関わりにおいての欲求となる。それらが満たされて初めて「なりたい自分」へと理想をめざすのである。学校では、おのこの生徒の自己実現を助ける場として学級集団がある。学級の中に励まし合いや支え合いの風土があれば生徒は、学級への所属感・連帯感を持ち、その中で伸びのびと自己を発揮することができる。「認め合う学級」とは信頼感の中に一人一人のよさや持ち味を認め合い、それぞれの目標に向かって共に育つ学級集団のことである。

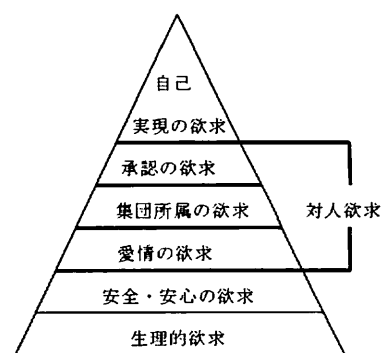


図1 マズローの欲求階層説

3 特別活動における望ましい集団活動

特別活動は、学級・学校生活への適応や望ましい人間関係の形成という学校生活の充実に欠かせない教育活動である。したがって特別活動において、望ましい集団活動の方法原理を通して集団や社会の一員として、よりよい生活を築こうとする態度を育てていくことによって、互いを認め合う学級集団をつくることができる。

(1) 望ましい集団活動の条件

- ・活動の目標をつくり、共通理解があること
- ・目的達成の手段や方法を考えて協力して実践すること
- ・一人一人が役割を分担し、それを共通理解していること
- ・一人一人の自発的な要求が尊重され、心理的な結びつきがあること
- ・成員相互に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること
- ・集団内で自由な相互交渉が助長されること

(2) 望ましい集団活動の指導の留意点

- ・集団を構成する個々の生徒が、互いに人格を尊重すること
- ・個々の生徒の個性を認め合い、伸ばし合うこと
- ・民主的な方法を通して、集団の目標や規範を設定すること
- ・相互に協力しあって望ましい人間関係を築き、充実した学校生活を実現すること

4 道徳における「心の教育」と認め合う集団

学習指導要領によると道徳の目標として、「道徳性を養う」とあり、道徳の時間の目標は「道徳的実践力を育成すること」とある。そのため、「教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに、生徒が人間としての生き方についての自覚を深め、豊かな体験を通して内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」とある。つまり道徳の授業は、人間の生き方や考え方について教師と生徒が一緒に考え合う時間と捉えられ、自他の内面を見つめることを通してそれぞれの自己肯定感を高め、互いに認め合う関係ができるものである。

5 教育相談の考え方

今日の学校教育相談として、下の表のように捉えることが多くなっている。

表1 学校教育相談の分類

(1) 治癒的教育相談	悩みを抱えた生徒個人に対しての面談
(2) 訓育的教育相談	問題を抱えた生徒個人、または集団に対しての面談
(3) 予防的教育相談	学級の生徒全員に対して、定期的に行われる個人面談
(4) 開発的教育相談	学級の生徒全員が対象で、人間関係づくり等を授業の形態で行う

これまでの学校教育相談としては個人を対象とした面談を中心としたものが多かったが、今日では学級経営に基盤をおき、全生徒を対象に主に授業形態で行われることが多い。とりわけ予防的・開発的教育相談は、人間関係づくりなどのふれあい体験を通して、学級が「居心地の良い」と感じられる場となり、認め合う学級集団を育むために有効であると考えられる。

6 人間関係づくりを意図した集団活動の方法

(1) 構成的グループエンカウンター

リーダーによって提示されたエクササイズを集団で取り組む中で、集団のメンバーが自己理解や他者理解を深め、自己の成長や好ましい人間関係を築く力を伸ばしていくことをねらったグループ体験活動。構成的とは「枠」のことであり時間や人数、ルールが設定される。エンカウンターとは、「出会い」「本音と本音の交流」のことである。つまり、「集団の育成を通して個を育てる」ことをねらいとしている。具体的には、①自己理解 ②他者理解 ③自己受容 ④信頼体験 ⑤感受性の促進 ⑥自己主張などのねらいを達成していくことができる。

(2) グループワーク・トレーニング

集団の中で自己発見や他者発見を通して集団としてのまとまりをつくっていく指導。エンカウンターが感情関係が主であるのに対し、グループワークは役割関係が主である。集団活動を通して個々の役割と仲間たちとの横の関係性を育てることで行動の変容を図るものである。係り活動や、学級会などの話し合い活動、学びあい等のグループ学習等もそうである。グループワークを通してメンバーが互いに気づき合い、それを伝え合って共に成長する。しかし、素直に自分を出してメンバーに気づいたことを言ってもらうためには、グループの中にあたたかく支持的・許容的な雰囲気や心理的な安心感がなければならない。本研究では、全体の前では自己主張しかねる生徒らが小グループ内での自己表現や自己主張を試みると同時に一人一人の考えを受け入れる土台づくりを考えている。

7 生徒理解・学級理解の方法

(1) Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）について

「いごこちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」と「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート（学校生活意欲尺度）」の二つの質問紙からできている。特にエンカウンターなどの実施前に検査し、学級の状態や生徒の意識をはかり（現在地を知る）、有効と思われるエクササイズを選んだり、その後の変容を見ることができる。

(2) エゴグラムについて

エゴグラムは交流分析の理論をもとにデュセイが考案したもので、自我状態や対人関係の特徴を知ることができる。人の心の働きには、批判的・保護的な親心（P）、知的でクールな大人心（A）、自由なまたは抑圧された子供心（C）があり、イメージに表すと次のようになる。

CP (Critical Parent) …… 厳しいお父さん

NP (Nurturing Parent) …… 世話好きなお母さん

A (Adult) …… 知的でクールなお兄さん

FC (Free Child) …… 自由きままなやんちゃ坊主

AC (Adapted Child) …… 言いたいことがいえないイイ子ちゃん

これらのうち、様々な状況に応じてそれぞれの要素が顔を出し対応をするというものである。5つの項目からなる質問に答えることによりどの項目が高いか低いかで、今の心の状態や性格の傾向を知ることができる。それを分析することで周りの人との関係を良くするためにどのようなことに気を配ったらいいか考えることができる。

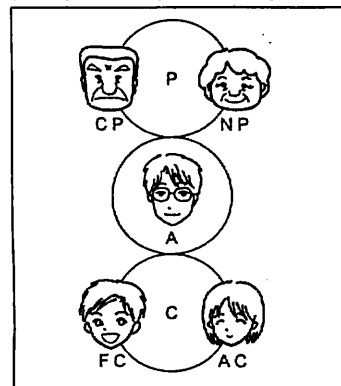


図2 心の中の5人家族

Ⅲ 授業実践

1 主題名 「互いに認め合う学級集団」

2 主題設定の理由

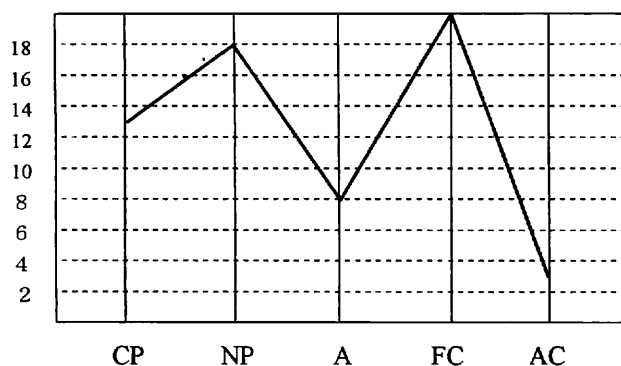
(1) 主題観

現代の子どもたちの特徴として人間関係が希薄で、同年代の子どもたちの目をととても気にする傾向があり、プライドが高く傷つきやすい、ストレスに耐える力が低いことなどがあげられる。そんな中で今、子どもたちに必要なこととして、人と関わる経験を持たせること、相手を理解し自分を理解してもらうこと、自尊感情を高めることなどが急務と言えよう。そしてその方法として、「集団の中で一人一人の子どもを育てる」という観点から、人間関係を体験できる構成的グループエンカウンターを取り入れ感情の交流をはかる。さらに、グループワーク・トレーニングを取り入れ、小グループの中での役割意識を高め、自分や他人の意見を尊重しつつ、合意形成を図る過程において互いに認め合える関係を築いていきたい。

(2) 生徒観（学級の実態）

Q-U「いごちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」によると本学級は、非承認群に属する生徒が多い。特技等を持つ一部の生徒を除いて多くは、学級内で認められているという実感が少なく自主的に活動しようという意欲が乏しい等、自分の居場所を見いだしていない可能性がある。また、一人一人が自分の気持ちを素直に表現できない傾向にあるということは、生徒本人の特質やこの思春期特有というだけではないだろう。周りの視線を意識して本音が出せないなど、日常生活の中で孤立や私的なグループ化が見られることから学級としての「受容や共感的風土が弱い」と見ることができる。

自己理解・他者理解のために行ったエゴグラムからは、落ち着いた大人心（A）が低く自由気ままな子ども心（FC）が高い生徒（資料1）と、従順な子ども心（AC）が高く常に何か我慢を強いられているような生徒（資料2）のタイプに分かれることから生徒間の関わり方が伺われる。

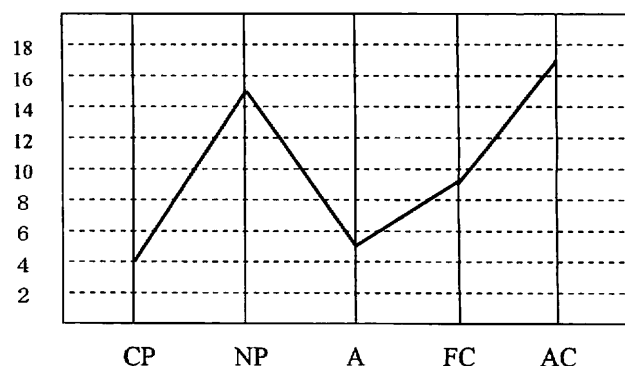


資料1 感情的なタイプの生徒のエゴグラム

＜抽出生徒の様子及び主な支援＞

Aは、思い立ったことをすぐ口に出さないと気が済まなかったり、自分の意見を押し通そうとする等セルフコントロールの面で問題を抱えている。いろいろなことに積極的に取り組む姿勢を生かし、友達の役に立っているという自己有用感を持たせるよう役割を与えたり、行いを賞賛するなどねぎらいの言葉かけなどをする。併せてストレスに対応する方法などのスキルを高め、耐性を身につけさせたい。

Bは、対人関係において消極的で、周りの生徒とあまり交わろうとしない。意志疎通の場面で投げやりな態度をとるなど、周りからも敬遠され孤立気味で、自己肯定感も低い。学習面での不適応も見られるが、係り活動など責任をもって果たす。人との関わりにおいて自信を持たせるような活動を通して、周りへの信頼感と学級の中での受容感を得させたい。



資料2 抑圧的なタイプの生徒のエゴグラム

(3) 指導観

学級という集団生活の中で、一人一人が尊重され、お互いの個性が認められれば充実した学校生活を送ることが可能となる。そこで、学級経営のなかでも道徳や学級活動の時間を通して、集団の中でお互いに支え合いながら、信頼関係、個人の感情交流を深めていきたい。また、集団活動の中で個々の役割と仲間たちの横の関係性を育てることで行動の変容を図りたい。そこで、リーダーを育てると同時に、メンバー全員がおのずと参加・発言するようなエクササイズを構成すること、またメンバー一人一人が役割を持つなど存在感を確認できるような工夫が必要である。エクササイズの選定としては、からだを動かすエクササイズからリレーションづくりを心がけ、抵抗感を取り除いていく。そのため、最初はあまり内面に踏み込まないような内容にするなど学級の様子を見ながらエクササイズを選んでいく。

3 指導計画

		題材・主題・エクササイズ名	ねらい	教育相談における評価	領域における評価
	帰りの会	Q-Uアンケート	学級や個人の実態調査	真剣にアンケートに取り組んでいる	
1	学活	自他の個性の理解 『なんでもビンゴ』	リレーションづくり 自己開示・他者理解	気軽に誰にでも尋ねたり自分のことを話したりすることができる	お互いを理解し合うなど人間関係の向上は見られる
2	道徳	集団生活の向上 『新聞紙パズル』	リレーションづくり 協力	グループで協力してひとつのことを仕上げるができる	他者に対する思いやりや親切・協力の姿勢が見られる
3	道徳	思いやり 『ブラインドワーク』他	信頼	言葉を用いずにコミュニケーションを図る工夫ができる 相手を信頼して身をまかせられる	相手のことを思いやった行動がとれている
4	学活	自己の個性の理解 『エゴグラム』	自己理解・他者理解	自分の心のありようを探り（現在の自分）、今後どうありたいか（理想の自分）を考えることができる	青年期にある自分を的確に見つめ自己理解に努めている
5	学活	望ましい人間関係の確立 『すごろくトーク』	自己開示・他者理解 自己表現	すごろくのテーマに沿った話題で自分のことを語ったり、他人の話を聞いて、理解しようと努めることができる	生徒相互のコミュニケーションなどの人間関係の向上は見られる
6	道徳	個性の理解 『気になる自画像』	自己受容・自己肯定感 自己理解・他者理解	友達のよいところに気づくことができる、友達の目を通して自分のよいところを再発見できる	お互いの個性を尊重できる
7	道徳	礼儀 『私の話を聞いて』	自己主張・傾聴訓練	拒否と受容のロールプレイを通して傾聴の大切さを体験的に知り、日常生活に生かそうとしている	人の話を聞くときの礼儀や、相手を思いやった聴き方ができる
8	学活	望ましい人間関係の確立 『3つのコミュニケーション』	自己主張（アサーション）	コミュニケーションの3つのタイプ（けんか・おどおど・さわやか）を知り、どの表現が適切か判断できる	集団や社会において大切なコミュニケーションの方法を探求している
9	学活 本時	自他の理解、望ましい人間関係の確立 『SOS-砂漠でサバイバル』	自己主張・他者理解 傾聴・自己受容・意志決定・合意形成	班討議を通して自分の考えを人に伝えたり、人の考えを聞いて理解しあうことで、自分も相手も認められる関係ができる	集団内における話し合いを通して、生徒相互のコミュニケーションなど人間関係の向上が見られる
	帰りの会	Q-Uアンケート	学級や個人の実態調査	真剣にアンケートに取り組んでいる	

4 本時の指導計画

(1) 題材名 「SOS～砂漠でサバイバル」

(2) 題材観

飛行機が故障のため砂漠に不時着した、という設定のもとに助かるためにどういう選択をするか個人決定からグループ決定の両方を行うものである。その過程を通して、自己や仲間のもとの見方・考え方を知るとともに、グループのメンバー全員が合意することのむずかしさ、大切さを体験的に学ぶ。

(3) ねらい お互いの考えを伝え合い相互理解を通して自分も相手も認め合う関係を築く。

(4) 指導の工夫

活発な話し合いにするために、次のことを心がける。

- ・グループの中に話しやすい雰囲気をつくるため、事前にリレーションを深めるエクササイズ（すごろくトークなど）をいくつか取り上げておく（共感的・受容的風土）。
- ・一人一人に参加意識を持たせるため班長、記録などの役割を与える（所属感・役割遂行）。
- ・一人一人問題意識を持たせるため、班決定の前に必ず自己決定をさせる（主体性）。
- ・それぞれ話し方・聞き方を工夫させる（コミュニケーションスキル）。

また合意形成の際には、次のようなルールを提示する。

- ① 納得できるまで話し合い、安易な妥協はしない。
- ② 話し合いは勝ち負けではない。
- ③ 多数決や平均値は用いない。
- ④ 少数意見にも十分耳を傾ける。

(5) 授業の仮説

それぞれ自分の考えをグループ内で伝え合い、合意形成を図ることで、お互いを尊重し、共に認め合う関係がつけられるであろう。

SOS～砂漠でサバイバル～課題シート

7月中旬のある日午前10時頃、みなさんが乗った小型飛行機はアメリカ合衆国の南西部の砂漠の中に不時着しました。その際飛行機は爆発して燃え上がりましたが、みなさんは奇跡的に無事でした。

無線で救援を求める時間もなく、また、現在位置を知らせる時間もありませんでした。最も近くの町は、ここから約110km南南西にあるということだけは不時着直前に確認できました。この付近はまったく平たんで、サボテンが生えている以外は何もあります。不時着直前の天気予報ではこれから日中の気温は43℃になるだろうと言っていました。地面に近い足元では、50℃にもなるでしょう。みなさんは、半袖シャツ、ズボン、靴下、スニーカーという軽装です。ただ、飛行機が燃えてしまう前に、みなさんは次の品物を何とか取り出すことができました。これから皆さんがやらなければならないことは、まず一つ目の決断です。

1 グループで相談して次のどちらにするか決めて番号を書いて下さい。

- ① その場にとどまり、助けを待つ。
- ② 住居地のあるところまで歩いていく。

2 二つ目の決断です。各自で次の10の品物に、重要な順で番号を付けてください。その後、グループで相談して上位5つを決めて下さい。理由も話し合ってください。

取り出せた品物	自分	グループ
コンパス		
一人一着のコート		
大きいビニールの雨具		
弾が入っているピストル		
この地域の航空写真の地図		
一人につき1リットルの水		
懐中電灯(乾電池4コ入り)		
2リットルのウオッカ(お酒)		
化粧用の鏡		
赤と白の模様のパラシュート		

資料3 課題シート

振り返りシート

チーム 名前

☆今日のグループの活動を思い出してみましょう。

1 グループの中で、あなたは進んで考えを言えましたか。

進んで言えた

4	3	2	1
---	---	---	---

 言えなかった

2 友だちの考えを、すすんで聞けましたか。

進んで聞けた

4	3	2	1
---	---	---	---

 聞けなかった

3 みんなは自分の考えを聞いてくれましたか。

聞いてくれた

4	3	2	1
---	---	---	---

 聞いてくれなかった

4 人によって違う価値観や考えがあることがわかりましたか。

わかった

4	3	2	1
---	---	---	---

 わからなかった

5 このグループワークをやって、気づいたこと、感じたことを何でも書いて下さい。

資料4 ワークシート

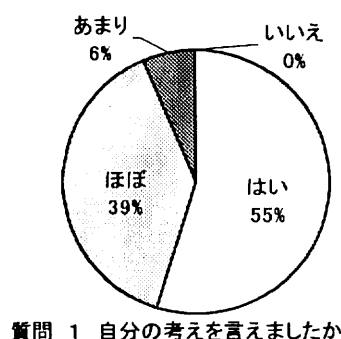
(6) 授業展開

過程	活動内容	グループワークの流れ 教育相談における評価【評価方法】	教師の支援と指導上の留意点 領域における評価【評価方法】
導入 5分	1 今日の授業のねらいを確認する これまでのことを振り返り、うまく言えなかった経験や人に理解してもらえた時の喜びなどを聞く	<インストラクション> ・グループ分け 課題の説明	・一人一人が課題の目的や目標がはっきりわかり、何のために活動するのか理解できるように援助
展開 30分	2 課題の内容を理解する 3 助けが来るのを待ってその場に留まるべきか遠く離れた町まで歩いて移動すべきかグループ内でいろいろな状況を想定して立場を決定するグループで検討して決める 4 砂漠で生き抜くには何があればいいか、またその理由は何カリストより必要性の高い順に個人で選ぶワークシートに記入する 5 グループ内で各自の順位づけを発表し、その理由などを話し合う 6 グループで話し合って、グループとしての順位を決める 7 グループとしての順位を発表する。 ・他と違う場合、理由を聞く	<課題実施> グループごとの課題解決 自己決定・自己主張・他者理解 役割遂行 合意形成 自己決定  自己主張・傾聴・他者理解・意志決定・合意形成（互いに説得し合いながら考えを練り上げる） <結果発表> グループごとに結果の発表	・わからない生徒がいたらグループで教え合うように助言する ・グループ内での役割を生かしつつ、自由な話し合いができるよう援助する ・最初は周りに相談したりせず自分の考えでよいことを告げる ・お互いの相違点をはっきりさせ相手の意見を認めた上で考えを練り上げ、一致点を見い出すよう助言する ・それぞれのグループがどれを選んだか一見してわかるように板書を工夫する
まとめ 15分	8 今日の授業で気づいたこと、学んだことをグループ内で発表し合い、振り返りシートに記入する  9 教師によるまとめ ・金子みすずの詩を朗読する、あるいは朗読してもらう ・授業のまとめをする	<ふりかえり> 解決過程を見直し「今ここでの」自分やメンバーの気持ちに気づく 班討議を通して自分の考えを人に伝えたり、人の考えを聞いて理解し合うことで、自分も相手も認められる関係ができたか 【観察・ワークシート】 <まとめ> 日常への一般化を示唆する ・気づいたことを意識し、行動し、習慣化することを目指す	・発表の順番を決めさせておくなど自己開示が抵抗なく始められるように考慮 集団内における話し合いを通して、生徒相互のコミュニケーションなど人間関係の向上が見られたか 【観察・ワークシート】 ・「みんな違ってみんないい」というところを取り上げ、「受容」することの価値を確認する

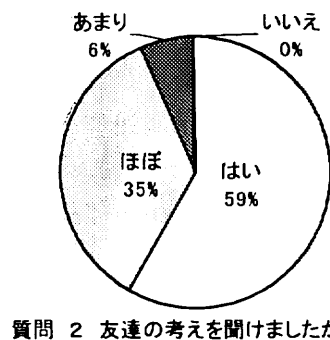
5 授業の分析と考察

＜授業仮説＞ それぞれ自分の考えをグループ内で伝え合い、合意形成を図ることで、お互いを尊重し、共に認め合う関係がつくられるであろう。

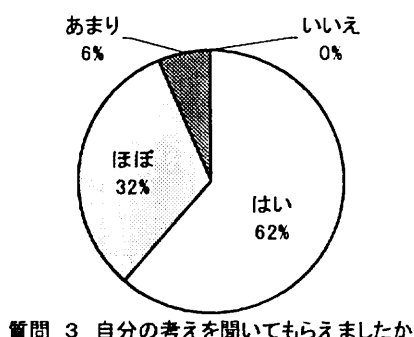
(1) 振り返りシートによる分析と考察



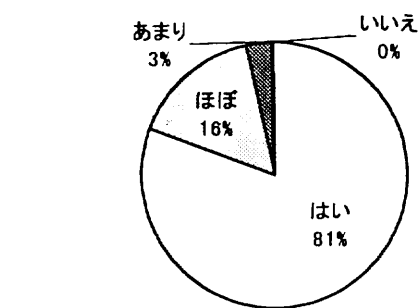
質問 1 自分の考えを言えましたか



質問 2 友達の考えを聞けましたか



質問 3 自分の考えを聞いてもらえましたか



質問 4 価値観や考えの違いがあることがわかりましたか

ほとんどの生徒がそれぞれ考えを話したり聞いたり、また聞いてもらえる体験をしたと言える。普段では自分の考えや気持ちを言いそびれてしまう生徒も、お互いの話を聞き合う場が設定されると、なんとか話をするということがわかる。また、常に話を独占したがる生徒にとっても人の話を聞く大切さを感じ取った様子が見られる。「はい」「ほぼ」を合わせた肯定的な答えが9割以上を占めることから互いの価値観を認めるというねらいは達成されたものといえる。

(2) 抽出生徒の様子を通して

Aは話し合いの場で中心になって話を進めていたが、発言を強要するなどやや押しの強い場面もあった。シェアリングでは、「自分ではそうじゃないと思ってたことでも、人の話を聞いて納得できた。自分と違う意見が聞けて新鮮。一人で考えるよりも皆で考えるとベストな答えがでる。」等と本人なりに人の意見を聞こうとしている態度が感じられた。4月からのAの様子からすると何でも自分中心に回っていなければ気が済まないという気持ちを抑えて何とか他者を受け入れる余裕が見えてきたと捉えられる。

Bはこれまで対人関係に不安を持ち、限られた中でしか心を許していないようであった。エンカウンターやグループワーク等、特に人との関わりが多い活動では参加を渋ることもあった。今回の価値のランキングの話し合いでは、自分の考えを自信なげにやっと向かいの友人にだけ聞いてもらうようなつもりでつぶやいていた。振り返りシートでは「こんなこと初めてやって楽しかった。」とあり、話を聞いてみると自分の考えを特定の友人以外にも聞いてもらえたという体験は満足を得られたようである。このことは、その後本人の少なからず自信となっているようで、給食時なども周りの人に話しかけたり、話しかけられたりしている様子が見られた。

IV 研究の考察

1 Q-Uテストの結果と考察

研究当初、本学級の生徒分布の特徴は、全国平均と比べると非承認群・学級生活不満足群合わせて承認得点が低いことが認められた。そこで構成的グループエンカウンターを始めとするさまざまなふれあいのあるエクササイズやグループワーク・トレーニングを行った後、再度Q-Uテストを行ったところ、右記の通りとなった。不満足群・非承認群の割合が減り、満足群の数は倍増した。全体的に承認得点もあがっていることから、級友との関わり合いの中で所属感を得、自己肯定感を高めることで自他共に認め合うというねらいにせまることができたと言える。

被
侵
害
高
得
点

高		低
侵害行為認知群 6 % → 3 % (全国平均 17 %)	学級生活満足群 19 % → 40 % (全国平均 35 %)	
学級生活不満足群 39 % → 24 % (全国平均 33 %)	非承認群 36 % → 33 % (全国平均 15 %)	低
承認得点		

2 学級の生徒の様子

図3 Q-Uの結果

これまでのエクササイズを通しての生徒の感想からは、次のようなものがあった。

- ・エゴグラムでは自分や友だちのタイプが当たっていたのでおもしろかった。今後はA（大人心）を高めるため、本や新聞をよく読んだり、じっくり物事を考えるようにしたい。
- ・自分が人からどう思われているのか気になっていたのがわかってよかった。ちょっと意外。
- ・人の意見を聞くことは大事だと思った。自分の考えも聞いてもらえてよかった。
- ・一人一人の考えが違うから、ちゃんと話し合う必要があるんだなと思った。
- ・人が生きていくためには協力して支え合っていかなければいけないんだと思った。

上記の感想にもあるように、生徒の自己認識や人間関係がよりよい変化を見せてきている。教室では新たなメンバーと休み時間を過ごす生徒もおり、給食時間の会話も少しずつ幅が広がってきているようである。いろいろなタイプの友だちの存在を確認し関わり合うことで互いにその個性を認め合い、学級が「居心地の良いと感じられる場」へと変容しつつあると思われる。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・いろいろな活動の中に一人一人の出番があることで、自己存在感を感じられるようになった。
- ・他者の目を通した自分のイメージを聞き合うことで、自己概念を修正し自分を肯定的に見られるようになった。
- ・ふれあい体験を持つことで、他者とかかわろうとする意欲や態度が見られるようになった。
- ・互いの意見や考えを聞き合うことで、それぞれの個性や価値観を認め尊重するようになった。

2 今後の課題

- ・基本的な人と関わるスキルを継続的に身につけさせる工夫
- ・シェアリングで素直な自分を出す、または受け入れる「場」の設定
- ・自分も相手も大切にしたい自己表現（アサーティブ・コミュニケーション）などコミュニケーションスキルの向上

<主な参考文献>

國分康隆監修	『エンカウンターで学級が変わるパート2』	図書文化	1997 年
河村茂雄編著	『グループ体験による学級育成プログラム』	図書文化	2001 年
日本学校GWT研究会編著	『学校グループワーク・トレーニング3』	遊戯社	2003 年